

笠間選書

13

伊勢物語

成立とその世界

原 國人著

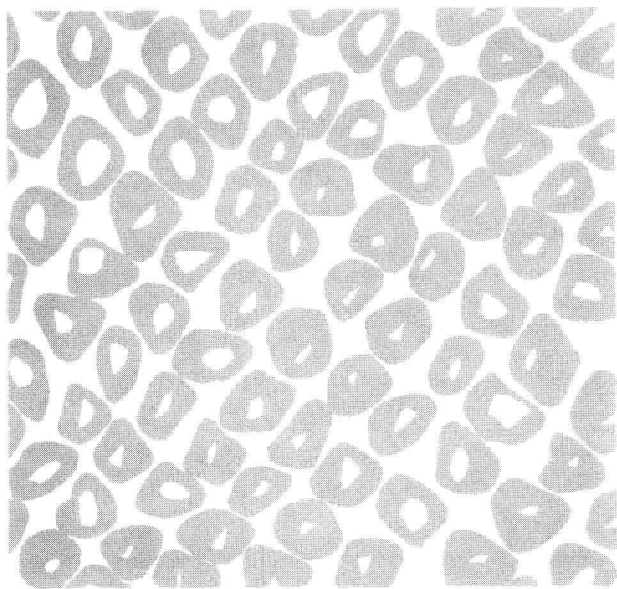


笠間書院刊

伊勢物語

成立とその世界

原 國人著



笠間書院刊

原 國人 (はら くにと)

昭和18年，徳島県に生れる。

昭和41年，国学院大学卒業。

現住所 〒339 岩槻市大字小溝876—199

笠間選書13 伊勢物語——成立とその世界——
昭和49年10月31日初版第1刷発行
定価 1,000円 一検印省略—
著者 原 國人 ©
発行者 池田猛雄
印刷 大文社印刷所
製本 笠間製本所
発行所 有限会社笠間書院
〒101 東京都千代田区神田神保町 1—46
電話03-294-0787・0996 振替東京56002
書籍コード 1391—953013—0924

序

いよいよ原國人君の第一論文集『伊勢物語——成立とその世界——』が刊行されることになった。私にとって何とも云い得ない喜びである。それというのも原君の学生時代から今日まで、一貫して彼の学問の成長をよくみて来たつもりであるし、何かと相談相手にもなって来たことによるのであらう。

本書の収むるところは、今までの彼の研究の本流である『伊勢物語』の研究である。そして「Ⅱ伊勢物語の成立」の諸編は、その発表前の原稿を一度は必ず拝見し、発表誌に推薦したものが大部分であるから、私自身の論文を一書にまとめたような錯覚と喜びの沸くのを禁じ得ないのである。

ところで『伊勢物語』は長い研究史を持ちながら、この物語ほど定説の少ない物語研究も珍らしいといわれる。現在もっとも問題となっている成立論さえ極めて論議は錯綜してとどまるところを知らない有様で、原君もこれに挑み、時代背景や問題の段を通して彼なりの新鮮な論を展開し重要な提言をなしている。しかし勿論、彼の説とても今後の多くの人々の検討を必要とするであらうし、原君もまた更にこの一筋の道に精進し、『伊勢物語』はいうまでもなく、目下手がけられている『竹取物語』をはじめとする諸物語研究の新生面の開拓と寄与に努力されることと確信している。

さて、原君と私とのつきあいは昭和四十年の春に遡る。ある時、畏友国学院大学教授樋口清之氏から原君の卒業論文を指導してみてくれないかとの御依頼があって、四月の末に原君が私を尋ねて研究室に見えた。卒業論文のテーマを聞くと「伊勢物語の芸能」であるという。更に詳しく聞くと『伊勢物語』を翁舞などの関連からみようという。そこでその問題では私は指導の任でないとお断りした。そして更に『伊勢物語』は物語文学であることが第一義で、それを究めることこそ先決であることを私なりに話した。よく考えてみますといつて帰って行った。私はかなり失礼な言も吐いたので、恐らくもう二度と見えないものと思ひ忘れかけていた。そうした七月のはじめ、また研究室に現われて、テーマを変更し、『伊勢物語』を文学として研究する決意を披瀝し、プランを示された。そのプランは以前と全く異り、しかも整然としていたのに驚いたのである。爾来、研究室や拙宅にまで足を運ばれ、論文は見事にまとまり、就職の相談にまで預った。その後、東京都の高校教員となったが、しかし、研究・研鑽をやめることなく、激職のなかから何か月かに一度は必ず論文をまとめ続けており、それが本書の構成をなす大部分である。

考察の鋭さと実証・考証・論理の正確さとは原君の論考のもつ特色である。君はなお春秋に富む。この小成に安んずることなく、益々この道に努力邁進して、将来の大成を心から期待するものである。

昭和四十九年八月二十八日

目次

序

はしがき

I 伊勢物語の世界

第一章 伊勢物語の世界

一、歌物語の方法

二、東下り

三、筒井筒

四、小野の雪

五、さらぬ別れ

第二章 沈黙と饒舌のあわい

一、行く螢

五
五
七
三
元
三〇
三
三
三

二、東下りふたたび……………	三
三、梓弓……………	四
四、花たちばな……………	四
五、血の涙……………	五
六、ふたたび歌物語の方法……………	五
七、狩の使——物語への飛翔——……………	五
付説 貞数親王の誕生……………	七

Ⅱ 伊勢物語の成立

第一章 七条後の文芸サロン……………	八
一、春澄朝臣拾子のことなど……………	八
二、追憶の文学……………	一〇
第二章 内教坊をめぐって……………	一三
一、在原氏と内教坊……………	一五
二、六十五段の場合……………	一四
第三章 藤原朝臣常行をめぐって……………	一五

一、七十七、七十八段の場合……………一五八

第四章 藤原朝臣良近をめぐって……………一八四

一、藤原朝臣良近の生涯……………一八五

二、百一段の解釈について……………一九六

三、百一段を基底するもの……………二〇四

第五章 源朝臣順をめぐって……………二三〇

一、八十七段の場合……………二三〇

付説 伊勢御の出仕について……………二四二

あとがき……………二五八

人名索引……………二六三

は し が き

本書は、Ⅰ、伊勢物語の世界、Ⅱ、伊勢物語の成立の二つの部分から構成されている。

Ⅰの部分では、歌物語の持つ本質的な享受方法を基盤にすえた上で、『伊勢物語』の世界を、ことばの沈黙と饒舌のあわいからさぐってみた。また、Ⅱの部分では、多面的な要素を持つ『伊勢物語』の成立を、七条后（宇多天后藤原朝臣温子）の文芸サロンを軸にした側面と、源朝臣順が関係した部分を中心に述べてある。七条後の文芸サロンから源朝臣順までをつなげる直接的なものは、まだ論証されてはいないが、この両者のいづれもが『伊勢物語』の成立に深いかかわりのあったことは、論証しえているのではないかと考えている。

『伊勢物語』が、人の生きざま、愛を描ききった作品であることは、いまさらいうまでもあるまい。どこまでも、真実の愛のありようを追求し続けたところに、この物語の魅力はあるのだ。本書が、その魅力を味うためのよすがとなってくれればと願っている。

昭和四十九年 盛夏

著 者

I

伊勢物語の世界

第一章 伊勢物語の世界

一、歌物語の方法

「歌物語」という以前に、益田勝実氏が指摘するように「歌語り」ということばがあった。たとえば『紫式部集』の次のような例、

わづらふことある頃なりけり。「かひぬまの池といふ所なんある」と、人のあやしき

「歌語り」するを聞きて心みに詠まんといふ。¹

98 世にふるになぞかひぬまのいけらじと思ひぞ沈む底は知らねど

また、心地よげになさんとして。²

99 心ゆく水のけしきはけふぞ見るこや世に経つるかひぬまの池

紫式部が病氣をしていたころ、おそらくは寛弘六・七年頃のことであろう。人が「かひぬまの池という所がある」と奇怪な「歌語り」をはじめるのである。この「かひぬまの池」にまつわる物語がどのようなものであったか、今となっては知る由もないが、とにかく、紫式部の時代には、このような「歌語り」が存在していた。そして、この「歌語り」を材料として、ある作為の

もとに(傍線1・2)、「かひぬまの池」にかけて二首の歌を紫式部は詠んだ。この事実を一般化したかたちでいうと、まづ〈歌語り〉がなされ、そしてそれを素材として歌がある意図のもとにくられるということになる。つまり、〈歌語り〉は内在的に、鑑賞とそれに基づく創造活動を持っているのである。しかも、99の歌に「水のけしきはけふぞ見る」と、「けふ」とか「見る」とかいつているので、おそらくは、「かひぬまの池」についての絵を鑑賞しながら、この享受は行なわれているのである。そして、このいわば享受の側から見た、内在的な〈方法〉は、実は、紫式部の時代よりずっと以前の時代からも在ったのである。

『大和物語』の百四十七段は、伝説を詠う歌人高橋虫麻呂が『万葉集』巻九に「見菟原処女墓」一首(一八〇二)として今に残した長歌、あるいは近代の文豪森鷗外の『生田川』となつたのと同じ生田川伝説を材料としながら、宇多天皇の周辺にある文芸サロン——七条后藤原温子(藤原基経女)を女主人とする——の雰囲気をよく伝えたものとして知られているが、この詞章は高橋正治氏によると、ABCDEの五段階からなっており、「Aはいわゆる生田川伝説である。B・Dは女一人男二人の墓がつくられたこと、Eは後日譚で、間のCはAの部分に絵にかいたものを見て、人が絵の中の人物になって歌を読んだことが記されている」と説明される。つまり、絵に書かれた物語Ⅱ生田川伝説があり、その中の登場人物に、この物語の享受者が〈感情移入〉をし、歌を詠むのである。とすれば、ここにも、『紫式部集』にみた享受の方法、つまり、鑑賞し創造するという行為が見られるのである。

当時の文芸作品の享受法の第一は「感情移入」であつた。このことは『大和物語』の例だけではなく、たとえば現在に伝わる古い絵画の類が引目鉤鼻という特殊な技法を持っている（あの『源氏物語絵巻』を見よ）ことを考えればすぐわかる。主人公女主人公の顔が没個性的な共通の表情を持っていることは、その絵を鑑賞する人にとってみれば、登場人物の表情が個性的である場合よりも、より簡単に抵抗をうけることなく、その人物の中へ自己を投入することが可能なものではあるまいか。そして、このことは、能面のふと死を呼びさますような表情にも、あるいは、文楽人形の首にも共通することなのである。

「歌物語」はその成立の過程において、このような鑑賞創造の営為を内在している。そして、このような形での享受の段階をへて、詞章の増益・推敲・書きかえがなされ、詞章として文字によって紙面に定着させられたものが現在に伝わる「歌物語」——『伊勢物語』『大和物語』など——であるといえよう。

このように「歌物語」の持つ「方法」を見据えるならば、この「方法」をオーバーラップさせるかたちでの、『伊勢物語』の世界への散歩もまた充分に考えられるのである。

二、東下り

『伊勢物語』の第九段、東下りの詞章は、諸家の考えておられるような深刻なものではなくて、案外単純なものかも知れない。

まず、その端緒、

むかし、をとこありけり。そのをとこ身をえうなきものに思ひなして、「京にはあらじ。あづまの方にすむべきにもとめに」とてゆきけり。もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり。みちしれる人もなくて、まどひいきけり。

「身をえうなきものに思ひなして」この「思ひなす」というのは強い表現だ。この「なして」には、「思ひなし」た存在とそれを客観的に対象化して認識する存在の二つが含まれている。いいかえると、これは強い決意の表明とそれに対する確認であり、物語の主人公の考えであると同時に、この主人公を創造した作者（と仮りにしておく）の思想でもある。ではなぜに「身をえうなきもの」としなければならなかったのか。あるいは「京にはあらじ」と思いつめなければならなかったのか。仮名遣いに従えば、「えうなし」は「要なし」の意。「用なし」とももちろんとれる。「もの」は「者」だけではあるまい。おそらくは、

おきもせずねもせでよるをあかしては春のものとてながめくらしつ（伊勢物語第二段）

の「もの」、つまり、「もののけ」「ものかたり」の「もの」の意。デモーニッシュな精神のありようとしての「もの」の意味が含まれているにちがいない。「あらじ」の「じ」もやはり意志の表明。では、その原因は何か。

在原業平という歴史的存在が持つ原因か。それとも、業平を素材とし、その陰に隠れてこの詞章の展開を演出した作者（ひいては享受者の側）にその原因があるのか。

前者ならば、二条后（藤原高子）との恋愛事件をからませた上での、古注・旧注以来の根強い説、たとえば唐木順三氏の「家柄は高貴であったが、宮位は遅々として進まない。藤原良房が太政大臣になったり、源融が左大臣になったり、藤原基経が右大臣になったりしてゐる時代に、皇族である業平はたかだか在中将の名でしきられてゐる程度である。ここには何か原因がなくてはならない」といった政治的狀況のもたらす敗北感によるものだという説が有力であろう。しかし、最近の王氏や賜姓源氏朝臣の平安朝前期の動向を極めて行く研究成果に拠ると、業平の官位昇段に停滯があつたことは事実であるけれども、決して不本意な、冷遇されている狀況があつたとは思えない。むしろ順調な出世ふりと考えた方が妥当のようだ。

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答えよ

の歌を残した業平の兄行平にしても、良吏型官人の典型であり、このことはあてはまる。在原一門は決して不遇な王氏ではなかつたのである。ちなみに、「在中将」の意味は唐木氏のいうように「五位の中将」ということではない。業平が阿保親王の五男で在原朝臣姓を賜っていた中将であつたから「在中将」なのである。また、源融が藤原氏の専横を憤って門を閉じ宮中に出仕しなかつた時期があつたという事実や、融が嵯峨天皇の第十二皇子であり、死後、怨霊となつて河原院に出現し、あるいは天位を望み基経に阻止されたなどという逸話が説話として伝えられていることを知つたならば、唐木氏の先に引用したような表現は決して出てこないはずである。

あるいは、角田文衛氏のように、「母の喪」にあつたことがその直接的動機であり、それを勧